島根

すっきり ワイドに きょう3ページ

隠岐魅力up

絆強める島前神楽

〝神楽県〟島根の中でも際立って個性的なのが、隠岐島前神楽（県指定無形民俗文化財）です。以前も紹介しましたが、今回は少しマニアックな情報をお伝えします。

島前神楽の本質であり独自性を生んでいるのが、元々娯楽ではなく主に「祈とう」が目的だったということ。内容は雨乞いや病気平癒、豊漁などさまざまです。

中世の頃から社家と呼ばれる人々が伝えてきましたが、社家とは、隠岐において祈とうの神楽を専業とするプロの神楽師集団で、神職の一面もあります。明治の神社制度改変以降は一般の人も神楽を舞うようになりましたが、それ以前は門外不出で、島前では次の5社家が神楽を守っていました。

西ノ島町の宇野家（別府、屋号は飯田）、秋月家（赤之江、屋号は森）、海士町の秋月家（日須賀、屋号は北）、駒月家（北分、屋号は客）、知夫村の石塚家（古海、屋号は石塚）。現在は石塚家と海士の秋月家のみが残り、当主の石塚芳秀さん（海士在住）を中心とした隠岐島前神楽保存会が伝承にあたっています。

隠岐島前神楽の「隋神」＝筆者撮影

初めて見る人は舞う場所の狭さに驚きますが、これも祈とうの神楽ゆえ。個人宅の、ほんの畳2畳の空間でも、いかにダイナミックに感じさせる舞いができるかで洗練を重ねてきたという歴史があります。また、隠岐の神楽では女性も一員になることが許されており、みこが演じる「注連行事」はかつての託宣の名残です。明治に神懸かりが禁止されてからは形式をとどめるのみですが、今でも最も重要な行法とされています。

リズムも独特で、どこか呪術的。おはやしは4分の2拍子と4分の3拍子が交互に繰り返されますが、この4分の3拍子は日本の伝統音楽には珍しく朝鮮半島に多いため、大陸との関係を示唆するとも考えられています。

各地区の夏祭りなどで御旅（神幸祭）の際に舞う道中神楽がありますが、私の住む海士と隣の西ノ島では、これを行う仕組みが違います。西ノ島は、道中神楽も神楽社中（社家の指導を受けている神楽同好会）に依頼するという、社家がいた時代と同じ請負方式ですが、海士では地区で練習して自分たちで舞います。そのため正統の島前神楽に倣ったもの（社家が指導する菱浦地区）もあれば、独自色の強いアレンジ版もあり……と多様。個性豊かで、比べると面白いものです。

海士町の文化財に詳しい榊原信也さんによると、「地下（地域）の者だけで道中神楽をすることで結束力が強まり、世代間の紐帯になっている。1カ月も練習を重ねるので、地域の一員だと実感できる」。特にIターン者が多い海士町では、神楽が地域内の交流にも役立っているようです。

（海士町役場総務課情報政策係 岡本真里栄）